

緑のカーネーション：ワイルドのゲイネス読解

角 田 信 恵

The Green Carnation: Reading Wildean Gayness

Nobue TSUNODA

In an age when the word “homosexual” is just emerging into the discursive order, Oscar Wilde displays his gay identity through the repetition of its performative acting; he intends to make use of his own sexuality so as to disrupt the discursive order. The green carnation which he wears as a symbol of his gay existence best represents the political implication of his acting. This paper aims to explicate the politics implied in the flower.

Received Sept. 30, 1996

1. 緑のカーネーション

1892年2月20日、Oscar Wildeの最初の喜劇、*Lady Windermere's Fan*の初日のことであった。舞台のうえでは、Cecil Graham役の男優が、ボタンホールに緑のカーネーションを飾っている。そして観客席には、同じ花をボタンホールに飾った、作者とその仲間たちがいた。作者自身の演出したパフォーマンスであった。

ワイルドにその花をつけてくるよう頼まれたGraham Robertsonは、そのパフォーマンスのねらいを次のように説明されたと回想する。

舞台上の青年が、緑のカーネーションをつけている。それを見て、みなはなにかと思う。そして場内を見回すと、あちこちに、ますますたくさん、不可思議な緑の点々が見える。「なにか秘密のシンボルに違いない。」彼らは言うだろう。「いったい何の意味だろう？」(Mikhail 212)

Regenia Gagnierは、ワイルドの存命中もその後も、緑のカーネーションは自然に対する人工の勝利の象徴として、すなわち審美主義運動の象徴として、受け止められたと言う(163)。表向きにはそうであったかもしれない。だが、この派手なパフォーマンスは、その花が審美主義運動以上のなにかを、いや、ワイルドの審美主義なるものがなにかそこに止まらないも

のを象徴していると、観客に感じさせずにはおかない。「いったい何の意味だろう？」この花は、シニフィエとの対応を欠いた過剰なシニフィアンとして、観客のまえにある。シニフィアンの過剰は観客の不安をかきたてる。シニフィエの空白にどんないかがわしい意味を読み取ろうとも、自由だからだ。そして、どんないかがわしい意味を読み取ろうとも、その意味をシニフィアンに送り返す道は断たれている。ロバートソンの回想は続く。

「それで、それはどんな意味だい？」僕は尋ねた。

「別になんの意味でもないよ」ワイルドは言った。「だから、だれにも言い当てられない何かでね。」(Mikhail 212)

この一回だけではない。同年3月4日、Theodore de Banvilleの*The Kiss*の初日にも、ワイルドは「全員が鮮やかな染めたカーネーションをつけた若い仲間とともに」現れて、注目を集めた(Bartlett 115)。1895年、*The Importance of Being Earnest*の初日にも、ボタンホールには同じ花があった。

ワイルドが同性間の性行為を行った科で2年間の重懲役を宣せられるのは、『ウィンダミア夫人の扇』の初日におけるパフォーマンスの3年後である。だが、この裁判もその過程で、劇場を法廷に、観客を傍聴者に変えて、いかがわしい何かを生成させようとする大がかりなパフォーマンスではなかったか。この裁判はあくまでワイルドの側からしかけたものであった。ワイルドはこの裁判において、緑のカーネーションのパフォーマンスを反復したのである。緑のカーネーションのパフォーマンスは、ワイルドのゲイネスの歴史において、中心的な位置を占める。本稿は、このパフォーマンスをめぐって、ワイルドのゲイネスを読み解こうとする試みである。

2. 語りえぬもの

ワイルドの育った家庭環境には、ホモセクシュアルに至る条件はそろっていた。娘時代、Speranzaというペン・ネームで、アイルランドの革命的愛国詩人として著名であった母。大柄でファリックなこの母に対して、父はアイルランド屈指の医師ではあったが、母よりも小柄で、影のうすい存在であった。家庭においても、世間的な知名度においても。さらに、母はワイルド誕生に当たって、娘を望んでいて、彼が幼いころ女の子の服装で育てた。これが、のちの倒錯につながったとする伝記作者も多い。この母に、彼が終生深い愛情を抱いていたことは、どの伝記作者も一致して認めている。

1882年1月14日の*Irish Nation*は、「美の使徒」としてアメリカでのデビューを果たしたばかりのワイルドを、「スペランザの息子」と呼んでいる。「忌まわしい圧政が祖国をおおっているときに、美を云々する」革命的愛国詩人の不肖の息子、という調子で(Ellmann 185)。

世間が彼を「スペランザの息子」と見ただけではない。実際、彼は「スペランザの息子」であった。たとえば、次のような倒錯的な警句。

All women become like their mothers. That is her tragedy.

No man does. That is his.

最初、*A Woman of No Importance* (1893a, 108) で使われたこの警句は、全く同じ表現で『真面目が肝心』(1895, 270) において繰り返される。それによって、この警句は、コンテキストに回収しつくせない固有のテキスト性を獲得する。こうしてそれは、母の息子であり続けたいというワイルド自身の欲望の表現としても読まれるように、読者をひそかに誘惑している。

だが、性的指向がいかにして構成されたかは⁽¹⁾、さしあたってはどうでもよい。そうした指向をもった人なら、昔も今も珍しくはない。ワイルドがゲイの歴史において特権的な位置を占めるのは、彼がその歴史がまさに始まろうとする時代に位置していて、意識的にその歴史を始動させたからにはほかならない。年譜を見てみよう。

1884年 ワイルド、Constance Lloyd と結婚

1885年 長男誕生

ラブシェール修正条項により、男同士のあらゆる性行為は2年間の重懲役を課せられる犯罪と見なされるようになる

1886年 次男誕生

Robert Ross の証言によれば、ワイルドはこの年、初めて同性間の性行為を行なう

1895年 ワイルド裁判始まる

ワイルドの結婚を、偽装結婚と見なすべき理由はない。残された手紙からすれば、けっこう熱烈な恋愛期間を経ての結婚であったし、結婚当初のエロティックな情熱も明らかだ(1963, 152-155)。ロス の証言を覆すような資料も、今のところない。オックスフォードがそのギリシャ研究によって、ホモセクシュアリティの温床であったことは、Linda Dowling に詳しい(41)。そのオックスフォード時代にも、ワイルドが同性間の性行為を行ったふしはない。彼がいつから自分の性的指向を意識していたかは、わからない。だが、それを実行に移したのは、その行為が制度からの違反とされるようになった、その翌年のことだ。彼は自らのセクシュアリティを、それが制度とせめぎあう地点で、快楽として引き受けたのである。

Michel Foucault は、ホモセクシュアルと呼ばれる人々が存在するようになったのは、1870

年、ホモセクシュアルという語が成立したときだと言う（1986, 55-56）。むろん、同性間の性行為は歴史と同じだけ古い。だが、ユダヤ・キリスト教の伝統では、そうした行為は口にすることもおぞましい罪であって、「語りえぬもの」とされていた（Sedgwick 95）。たしかに“buggery”や“sodomy”という語はあった。だが、“buggery”はブルガリア人の行うような忌まわしい罪悪という意味だし、“sodomy”は旧約聖書のソドムの町に由来する。どちらの語も、ホモセクシュアルを特定しない婉曲な表現であったし、Alan Brayによれば、どちらも、もっと広い範囲の性的逸脱を意味していた（20-21）。ホモセクシュアルという語の成立以前、同性間の性行為は、きわめて忌まわしい行為ではあっても、あくまで一時的な逸脱行為という以上の意味づけはされていなかったのである。

ホモセクシュアリティという語が英語に導入されたのは、*OED*によれば、1897年。1885年のラブシェール修正条項も、その行為を“gross indecency”という言葉で迂回している。ワイルド裁判の行われた1895年、その行為をする人を特定する語は英語にはない。だが、その条項が迂言法を用いてではあっても、その行為を制度の言説／言説の制度に取り込まざるをえなかったし、取り込もうとしたことの意味は大きい。むろん、取り込まざるをえないほど、そうした行為は広まっていた。だがまた、だからこそ、犯罪というかたちで取り込むことによって、制度はそれを飼いならそうとした。この時代、「語りえぬもの」であったその行為は、制度の言説／言説の制度のただなかに、亀裂を生じさせようとしていた。亀裂は、「語りえぬもの」に名が与えられるとともに、再び埋められてしまうにしても。ワイルドの生きた時代、「語りえぬもの」をめぐる、快楽と制度はせめぎあっている。そして、ホモセクシュアリティが制度と対峙する拠点となりうる、この歴史上の特権的な瞬間を、ワイルドは利用する。

「自然は芸術を模倣する。」“The Decay of Lying”におけるこの有名な命題を敷衍して、ワイルドは言う。

今日、人々が霧を見るのは、霧があるからではなくて、詩人や画家が、霧の効果の神秘的な美しさを人々に教えたからだ。ロンドンには何世紀にもわたって、霧はあったかもしれない。…しかし誰もそれを見なかった…。芸術が霧を作り出すまで、それは存在しなかった。（1889a, 986）

霧をホモセクシュアルに、芸術を言説の制度に置き換えれば、ワイルドの論じる自然と芸術の弁証法は、そのまま、フーコーがのちに論じる制度と快楽の弁証法になる。そしてワイルドは、意識的に、霧＝「語りえぬもの」を体現する存在として、自らを生成させてゆく。緑を演出することによって。

3. 緑の諸変奏

1897年に出た Havelock Ellis の *Sexual Inversion*, ホモセクシュアリティを医学しようとするこの初期の試みには、次のような記述がある。「性倒錯者が緑の衣服を好むことも認められている。シュヴァリエは何年か前に、パリで、男色家の一団が緑色のネクタイを目印に付けていたといっている。」(261) エリスの言うのとは違って、ホモセクシュアルであることと緑に対する好みとの間に、本来的な関係などありはしない。ワイルドにしても、ホモセクシュアリティを暗示するときには、つねに“purple sin”という言いかたをする。緑は、バラ色が伝統的に異性間の恋愛の象徴として使われてきたアンチテーゼとして、あくまで象徴のレベルで選ばれた、ホモセクシュアルの仲間うちでのサインであった。

ワイルドが初めて同性間の性行為を行ったのは、1886年。翌1887年からのテキストには、プロットとは無関係に、緑がしばしば書き込まれる。舶来のならわしの利用である。“The Sphinx without a Secret” (1887) における「緑の馬車。」“Lord Arthur Savile’s Crime” (1887) における「緑の目。」“The Disciples” (1893) における「緑の髪房。」「緑の研究」という副題がついている“Pen, Pencil, and Poison” (1889) には、「個人においては、精妙な芸術的な気質のサインであり、国民にあっては、道徳上の退廃でないとすれば、放縦をあらわす、緑に対するあの奇妙な愛」(1889b, 996) という、いかにも思わせぶりの言葉がある。“The Critic as Artist” (1890) の舞台をなすのは、「グリーン・パークを見おろすピカディリの家の書斎。」グリーン・パークは実在の公園名でもある。だが、このテキストにおいて、舞台があえてその公園であるべき必然性はない。緑はコンテキストには回収されない意味をはらんで、これらのテキストから浮かび上がっている。1894年、ワイルドの友人であった Ada Levenson は、*Intentions* (1891) を特別に製本させ、彼に贈った。その礼状に、彼は「それは原本よりも、もっと緑です」(1963, 373) と記す。緑はたしかに、「審美的」もしくは「倒錯的」と、ほぼ同義に使われている。

Salomé (1893) において、*Salomé* は若い兵士に小さな緑の花を投げ与えようと約束する。緑である必然性がないにもかかわらず、緑であることが強調されている——「小さな花を、小さな緑の花を」(557)——この花は、カーネーションであるはずだ。緑のカーネーションについての最初の記録は、1892年2月20日、上述の『ウインダミア夫人の扇』の初日のときのものだから、ワイルドがそれを「発明した」(Wilde 1963, 373) のは⁽²⁾、1891年の終わりか、1892年の始めごろだろう。それは画期的な発明であった。緑という形相にカーネーションという質料を与えること。そのとき、神がキリストに受肉したように、「語りえぬもの」はカーネーションにおいて受肉する。“carnation”という名は、ラテン語の *carn*-=flesh, 肉に由来する。緑を受肉させるのに、ほかの花でなく、カーネーションを選んだとき、ワイルドの念頭にはこの語源、そして、“incarnation”という語の神学的意味があったはずだ。ワイ

ルドはこの花において、「語りえぬもの」を可視化させたのである。

「語りえぬもの」の可視化とは、きわめて逆説的な行為だ。その花は明らかになにかの象徴として、目には見える。だが、それが象徴するものは、あくまで、「だれにも言い当てられない何か」でしかない。この花は、制度の言説／言説の制度に空白を穿つと同時に、そこに穿たれた空白を可視化させる。その空白をかたどっていると言ってもよい。それは、政治的な意義を担うべく、案出された花であった。

だから、この花を案出したとき、ワイルドはゲイになったとすることができる。医学用語として成立したホモセクシュアルという語は、性対象として同性を選ぶ性的指向をもった人をさす。一方、ゲイとは、そうした性的指向をよりどころに、秩序の変革をめざす態度をさしている。フーコーは言う。

私は「懸命にゲイにならないければならない」と言いたかったのです。おのれの性の選択が現存しているような次元、それが生全般に効果を及ぼすような次元に身を置くべきだと。…ゲイであることは、…差し与えられた生の様式を拒否する或る種の流儀であり、性的選択を生存の変革の操作子（オペレーター）にすることなのです。…同性愛者になるべきなのではなく、しかし懸命にゲイになるべきなのだ…。(1982: 41-42)

1894年、*Green Carnation* という小説が、匿名で出版される。ワイルドと Lord Alfred Douglas とのほとんどこれ見よがしの関係を揶揄する小説である。緑のカーネーションは、おもわく通り、ワイルドのゲイネスを象徴する花として、一定範囲内では流通していた。ナチスはユダヤ人にはダビデの星を、ホモセクシュアルにはピンクの三角形をつけさせた。排除すべき存在を可視化するためであった。ワイルドがしたのは、それと同じことだ。ただし、ピンクの三角形が、ホモソーシャルな社会を脅かす存在を析出すべく、権力が強制したしるしであったのに対して、緑のカーネーションは、自らの他者性を析出するために、彼自らが考案したしるしであった。E. M. Forster の *Maurice* には、「オスカー・ワイルドのやから」という言葉がある。のちにホモセクシュアルの代名詞となった「オスカー・ワイルド」とは、ワイルド自身が自作自演して流通させた商品であった。彼は、懸命にゲイになろうとした、すなわち、快樂を意図して政治的なことに転化しようとした、おそらく最初の近代人だ。「個人的なことは政治的なこと。」70年代ウーマンリブの標語は、彼にもあてはまる。

4. 緑のカーネーションの政治学

1892年4月の *The Artist* には、緑のカーネーションの作り方が載っている。白いカーネーションの茎をマラカイト・グリーンというアニリン染料の水溶液につける。12時間後、染料は花びらまで上がり、ちょうどよい色に染まる (Bartlett 50)。この花は、西欧近代における

ホモセクシュアルな欲望の構造をかたどって、自然を侵犯する倒錯の花として作られるのである。

18世紀から19世紀にかけて、西欧に近代家族が出現する。近代家族はセクシュアリティを囲い込む装置としても機能したから、その出現はヘテロセクシュアルな体制の支配を画する出来事であった。むろんそのとき、ホモセクシュアルな欲望は抑圧／排除される。その欲望は、人をヘテロセクシュアルな存在へと強制的に向かわせるエディプスに対する侵犯でしかなくなるのである。だがまた、倒錯した欲望であり、侵犯でしかない欲望であるからこそ、それは父の掟に収斂する近代そのものの構造を、内部から蝕みもしうる。西欧近代が、あれほどのホモフォビアを示したのは、おそらく、Joël Dorが言うように、ホモセクシュアルな欲望が「父の掟という世界を構造化する意味作用」を「嘲笑の対象として貶め」ようとする欲望だからだ(157)。緑のカーネーションは、ホモセクシュアルな欲望の構造を正確にかたどって、ヘテロセクシュアリティを自然として強制する制度の言説／言説の制度のただなかに、異物として、ノイズとして、置かれている。

緑のカーネーションのはらむ政治的意味は、“The Portrait of Mr. W. H.”や*The Picture of Dorian Gray*にみられる“effeminate”な美青年というワイルド好みのトポスのもつ意味にも通じる。Alan Sinfieldは“effeminacy”という語の歴史をえんえんと辿ってみせる。そして、本来はホモセクシュアリティを暗示する語ではなかったのに、ワイルドの時代までには必ずしもではないけれども、ホモセクシュアリティを暗示するようになったと論じる。男らしさ／女らしさというジェンダーの規範が固定化したからである(25-51)。だが、さしあたっては、Richard Dellamoraが言うように、それが当時、「ののしりの言葉で、しばしば男同士の欲望を暗示」(199)していたという理解で、十分だろう。むろん暗示のレベルは必ずしも万人了解のレベルではない。だが、“Victorian cult of manliness”の時代にあって、否定的な意味合いしか与えられていない語を肯定的な意味合いに使ってみせること、そしてまた、それによってジェンダーの規範を攪乱してみせること、そのことのおぞましさは、万人に感知される。“effeminate”な美しさをたたえた美青年という倒錯の美学は、ホモセクシュアルというアイデンティティが成立しておらず、“effeminate”＝ホモセクシュアルという意味が確立していないからこそ、余剰のいかがわしさを生じさせるのである。

裁判に至るまで、ワイルドはその快楽を、制度とのせめぎあいの場において、ほとんどこれみよがしにひけらかしてゆく。テキストによって、そして、さらに、緑のカーネーションを使ったパフォーマンスによって。ただし、あくまで「語りえぬもの」というかたちのままで。「いったい何の意味だろう？」ワイルドは、決して「語りえぬもの」に名前を与え、それに市民権を与えようとするわけではない。語りえぬ欲望が名づけられ、市民権を得ることは、ヘテロセクシュアルな体制の不備を補い、体制を強化することでもある。そしてそこからは、快楽は抜け落ちる。現在さかんに議論されているカミングアウトのはらむ逆説である。

Judith Butler は、「「アウトである」ということは、「アウトである」と「イン」の両極においてのみその意味を見いだす」(119)と言う。ワイルドは、こうしたアウトとインの逆説を承知していた。緑のカーネーションも、“effeminate”な美青年という美学も、あくまでアウトとインの両極のあいだに、ヘテロセクシュアルな体制に対する差異に、止めおかれている。緑のカーネーションは、クィア (queer)⁽³⁾の本来の意味、「変な、奇妙な」、つまり「変態的」な花だ。1892年3月の *Ladies' Pictorial* は、それを正しく、“unmanly”であると言いつけている (Bartlett 50)。

Sigmund Freud がエディプス・コンプレックスという概念を私信のなかで披瀝したのは、1897年、ワイルド裁判の2年後のことであった。この裁判によって、ホモセクシュアルという存在の様態をまとめあげることになったワイルドと、ホモセクシュアリティを抑圧する装置を発見したフロイトは、同じ近代を——両者の生年は2年違うだけだ——、同じように読んでいる。むろん、全く別様の態度で⁽⁴⁾。ワイルドのゲイネスは、いまだ名づけられていない欲望によって、いまだ名づけられていない近代の構造そのものを、内部から蝕もうとする。

5. ^{ゲイ}陽気な哄笑

ワイルドのゲイネスは、たえず陽気=gayだ。真面目であることは、なにかにコミットすること、なにかの規範を擁護することだから。彼の陽気さや寛大さは、彼に出会った人に共通する印象であった。たとえば、Richard Le Gallienneは「彼があればほど魅力的であったのは、たえざる陽気さのせいであった」と回顧している (150)。むろん、ここでの陽気さ (gaiety) には、ホモセクシュアルの意味はない。

たとえば、『緑のカーネーション』の出版をめぐる。 *Pall Mall Gazette* は、匿名で出版されたこの本の著者が、ワイルド自身ではないかと推測する。それに対して、彼は次のように書き送る。

僕はあの壮麗な花を発明した。しかし、その奇妙に美しい名前を横取りしている、あの中流的な月並みな本に関しては、言うまでもなく、どんな関係もない。その花は芸術作品だ。その本はそうでなはい。(1963, 373)

その陰では、作者の Robert Hichens にあてて、君が書いたんだらう、という電報を打つ。一方、友人への手紙には「ヒッチンスにあんな気のきいたものができるとは、思いませんでした」(1963, 373)と記したりもする。自分を揶揄するこの小説の出版を、彼はたしかに、上機嫌で、おもしろがっている。だから『真面目が肝心』の4幕版の草稿(1894)にも登場させ、Lady Bracknellに言わせる。「この『緑のカーネーション』というらしい冊子は、風変わ

りな文化についての本みたいね。…病的で中流的なようね。」(383)

彼は『真面目が肝心』について、「それは一羽の蝶が蝶たちのために書いたものだ」(1963, 382)と言う。“butterfly”という語が、当時、ホモセクシュアルを指す隠語であったという指摘は、今のところない。しかし、“The Model Millionaire” (1887)においても、「完璧な輪郭をもった、無職で陽気で無能な青年」は、蝶にたとえられる。「雄牛や熊のなかにあつて、蝶になにができただろう。」(134)「雄牛や熊」が、有能な、けれども無骨なイギリス紳士=John Bullであるなら、蝶は、いかにも、ゲイネスにぴったりのメタファーではないか。ホモセクシュアルがいまだ存在の範疇を獲得していなかったように、蝶も地に足がついておらず、ただふわふわと「陽気に」舞っているのだから。

彼の陽気さは、裁判の前夜にいたっては、哄笑になる。アルジェリアで当時彼と出会ったAndré Gideは記している。

彼は笑いだした——とどろきわたる笑い、快樂のというよりは勝利の笑い、果てのない、どうしようもない、不遜な笑いであった。…

「こんなに笑ってすまないが、どうにも止まらないんだ。」(1920, 282)

ジードは、裁判での敗北を予想もしないで、とコメントする。だが、ワイルドには予想はついていたはずだ。彼は次のようにジードに言っている。「僕は進めるだけ進んでしまった…。もうこれ以上は行けない。こんどはなにかが起きるにちがいない。」(1920, 279)この哄笑は、緑のカーネーションの果てにあつて、その政治学を補完している。

そのワイルド論のなかで、このときの哄笑に言及している三島由紀夫もまた、彼自身、哄笑で有名であった。

6. 制度と快樂の共依存

緑のカーネーションのパフォーマンスの晩に戻ろう。その晩、ワイルドは火のついた煙草を手にして舞台に上り、彼自身の言葉によれば、「愉快な不滅のスピーチ」をする(1963, 312-13)。みなさんは僕の劇をとて知的に鑑賞された、みなさんは今晚、大成功をおさめられたのです(Le Gallienne 152-53)。こうして観客を大まじめに讃えてみせて、自分の劇がこの上なくすばらしいもので、自分自身もその上演をとて楽しんだと述べたてる。緑のカーネーションのパフォーマンスとこの作者の挨拶は相俟つて、当然、スキャンダルを引き起こす(Mikhail 212)。だが、それこそが、ワイルドのねらいであった。それは、過剰なシニフィアンとしての、「語りえぬもの」としての「オスカー・ワイルド」が、この晩この劇場で生成したことの証にほかならないのだから。ワイルドはこの晩、制度と快樂の出会いを演出したのである。

快楽と制度は共依存する。制度に外がない以上、制度の外なる無垢な快楽なるものは、幻想でしかない。ヘテロセクシュアリティは制度に汚染されていて、ホモセクシュアリティは制度から無垢だ、などということはあるまい。一方、制度も快楽を抑圧／排除したり、飼いならしたりすることによって、自らを維持している。フーコーは「権力と快楽の無限に繰り返される螺旋」(1986, 58)という言葉で、快楽と制度の共依存関係をまとめあげている。同性間の性行為を快楽として引き受けたそもそもの最初から、ワイルドにとってその快楽は制度とのせめぎ合いの場にあった。彼はホモセクシュアリティを、あくまで倒錯と位置づけていた。むろん、だからといって、ヘテロセクシュアリティを自然とみなしていたというわけではない。

ワイルド裁判においては、快楽と制度の共依存は極限のかたちをとる。法の言語という最も制度的な言語によって有罪を宣告されること——それがワイルドの「意志」であったと言っているかどうかは、分からない。だが、この裁判に彼を駆り立てたものは、冷静に計算された緑のカーネーションを使ったパフォーマンスに彼を赴かせたのと、同じ衝動であったはずだ。裁判の経過は、もくろみ通りだった。制度の言説／言説の制度は、彼を「語りえぬもの」を体現する存在として裁いた。制度の言説／言説の制度は、抑圧／排除しているものの存在を公に認めたのであり、そうした存在がワイルドの身体というかたちをとって、制度の言説／言説の制度のただなかに立ち現れることを許したのである。

多くの評者は、ワイルドの母や兄が、ワイルド裁判をアイルランドのための闘いと見なしていたことを、狂気の沙汰としている。だが、緑のカーネーションを使ったパフォーマンスも、そしてワイルド裁判も、ワイルドがワイルド流のやりかたで、ひとりで闘った反英闘争でもあった。制度の言説／言説の制度に対する差異としてのワイルドの身体において、セクシュアリティとナショナリティは交差する。家父長制の世界において、女としての主体が非＝男としてしか構築できないように、英国の植民地人であるアイルランド人の主体も、非＝英国人としてしか構築できない。アイルランド人はメタフォリカルには女であったし、実際、当時の言説の制度は、アイルランド人をしばしば女として描出していた。そうした意味では、アイルランド人の男は、みな、男でない男、ホモセクシュアルだ。そして、女もホモセクシュアルもアイルランド人も、非＝男として、または非＝英国人としてしか表象しえないとすれば、彼らは言説の制度にあっては、不在もしくは欠如でしかない。ワイルド自身、深層にある固有な「自己」というロマン派的なイデオロギーを、一貫して否認していた。緑はエメラルドの島と呼ばれたアイルランドの象徴として、当時、反英独立運動のなかで、さかんに用いられていた。緑がホモセクシュアルとアイルランドに共通する象徴であったことは、偶然の暗合でしかないし、緑のカーネーションに、ワイルドが彼の“*Irishness*”をも、意図的に受肉させたという証拠はない。だが、制度の言説／言説の制度との闘い——それは反英闘争ではあっても、決して「独立」運動ではない——において、彼はまさしく「スペラ

ンザの息子」であった。ワイルド自身の意図を離れて、緑のカーネーションは彼独自のアイランドの象徴でもあった。

ワイルド裁判は、緑のカーネーションのパフォーマンスの反復であった。むしろ、反復は必ず差異を伴う。「語りえぬもの」としての「オスカー・ワイルド」のパフォーマティブな演出は、存在の様態を規定するbe動詞に対する抵抗の身振りであった。だが、法廷におけるこのパフォーマンスは、「ワイルドは“sodomite”である」という言説——そしてそれはすぐに「ホモセクシュアルである」という言説に変わるのだが——を成立させ、「語りえぬもの」のパフォーマティブな演出の、無限の反復に終止符をうつ。こうして、ワイルドは結果的には、おそらくは意図に反して、ホモセクシュアルというアイデンティティの範例になった。その時点において、緑のカーネーションは、もはや着脱可能なアクセサリーでも、過剰なシニフィアンでもなくなる。それは、ワイルドその人の存在の様態を規定する記号、ワイルドを制度の言説／言説の制度に結びつけるbe動詞として、機能している。

注

- (1) ホモセクシュアリティをめぐる、本質主義vs.構成主義の議論がある。性の指向性は、生まれか育ちか、つまり、遺伝的器質的なものか、それとも、文化的構築物か、という議論である。筆者は、後者の立場をとる。性の自認すら、解剖学上の性に直接由来するわけではなく、まわりの人々の呼びかけによるのだから。
- (2) 緑のカーネーション自体が、フランス伝来のホモセクシュアルのサインであったとする批評家もいる。だが、その証拠が提示されたことはない。
- (3) 近年欧米でよく使われるクィアという用語には、ホモセクシュアルだけでなく、レズビアン、トランスセクシュアル、トランスヴェスタイトなど、多様な性倒錯とされるものが含まれる。ゲイもホモセクシュアルとレズビアンの両方を指して使われることもあるが、クィアは、積極的にノン・ストレートな生き方を選び取る人々が連帯するための言葉だと言える。黒人が差別用語であったブラックという語を逆手にとって、「ブラック・イズ・ビューティフル」という標語を掲げて、差別と闘ったように、ノン・ストレートも自らをクィアと規定することによって、状況の変革を目指す。「ストレートでなくてなにがわるい、ストレートでないからいいのだ！」という態度である。(伏見5-6)
- (4) おそらく、両者の態度の違いには、フロイトが旧約の怒れる神、この最高度に抑圧的な父のもとなるユダヤ人であり、ワイルドが英国の植民地人であったアイランド人であったことが、関与している。もうひとりのユダヤ人、Susan Sontagを思い出してもよい。彼女が1966年という時点で、父の掟を侵犯しようとするワイルドの態度を「キャンプ趣味」という言葉でまとめあげたことは画期的であった。だが同時に、彼女は「わたしはキャンプに強く惹かれ、またそれに劣らぬほど強く反撥を感じている」(303)とも言う。彼女がフェミニズム運動から一線を画し続けた理由も、おそらくそうした感受性のありようにある。

引用文献

Bartlett, Neil. *Who Was That Man?: A Present for Mr Oscar Wilde*. London: Serpent's Tail, 1988.

Bray, Alan. 『同性愛の社会史——イギリス・ルネサンス——』 田口孝夫／山本雅男訳、東京：彩流社、1993.

- Butler, Judith. 「模倣とジェンダーへの抵抗」 杉浦悦子訳. 『イマージ』 Vol. 7-6 (1996): 116-35.
- Dellamora, Richard. *Masculine Desire: The Sexual Politics of Victorian Aestheticism*. Chapel Hill: U. of North Carolina Pr., 1990.
- Dor, Joël. 『構造と性倒錯：フロイト／ラカンの臨床的視座』 小出浩之訳. 東京：青土社, 1995.
- Dowling, Linda. *Hellenism and Homosexuality in Victorian England*. Ithaca: Cornell UP, 1994.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Hamish Hamilton, 1987.
- Ellis, Havelock. 「性的倒錯論」 『ホモセクシュアリティ』 土屋恵一郎編. 富山太佳夫監訳. 東京：弘文堂, 1995.
- Foucault, Michel. 1982. 『同性愛と生存の美学』 増田一夫訳. 東京：哲学書房, 1987.
----- 1986. 『性の歴史 I：知への意志』 渡辺守章訳. 東京：新潮社, 1990.
- 伏見憲彦. 『クィア・パラダイス：「性」の迷宮へようこそ』 東京：翔泳社, 1996.
- Gagnier, Regenia. *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public*. Stanford: Stanford UP, 1986.
- Gide, André. 1920. *If It Die*. Trans. Dorothy Bussy. Harmondsworth: Penguin, 1982.
----- 1948. *Journals 1889-1949*. Trans. Justin O'Brien. Harmondsworth: Penguin, 1967.
- Le Gallienne, Richard. *The Romantic '90s*. London: Robin Clark, 1993.
- Mikhail, E.H., ed. *Oscar Wilde: Interviews and Recollections*, Vol. 1 London: Macmillan, 1979.
- 三島由紀夫. 「オスカア・ワイルド」 『三島由紀夫文学論集』 東京：講談社, 1970. 464-75.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire*. NY: Columbia UP, 1985.
- Sinfield, Alan. *The Wilde Century: Effeminacy, Oscar Wilde and the Queer Moment*. London: Cassell, 1994.
- Sontag, Susan. 「《キャンプ》についてのノート」 『反解釈』 高橋康也／出淵博／由良君美／海老名宏／河村錠一郎／喜志哲雄訳. 東京：竹内書店, 1971.
- Wilde, Oscar. 1887. "The Model Millionaire." *Lord Arthur Savile's Crime and Other Stories*. London: Methuen, 1916.
----- 1890. "The Critic as Artist." *Complete Works of Oscar Wilde*. London and Glasgow: Collins, 1970.
----- 1893a. "A Woman of No Importance." *Plays*.
----- 1893b. "Salomé." *Complete Works*.
----- 1894. "The Importance of Being Earnest." *Complete Works*.
----- 1895. "The Importance of Being Earnest." *Plays*.
----- 1963. *The Letters of Oscar Wilde*. Ed. Rupert Hart-Davis. London: Rupert Hart-Davis.